

昭和四十九年十二月二十五日
第三種郵便物認可
（毎月一回・十五日発行）

（通第三〇七号）

慈

光

第二十六卷

第十二号

次

目

利他願海……………	近角常観……………	(1)
求道の中心……………	福島政雄……………	(6)
念仏詩抄……………	木村無相……………	(11)
池山寿夫様を悼む……………	川畑愛義……………	(14)
池山寿夫様を憶う……………	花田正夫……………	(15)
高原憲先生聞書……………	平岡坦……………	(22)

利他願海

近角常觀

念仏為本の師教は即ち弥陀の本願である。法然上人の念仏は即ち南無阿彌陀仏の仏名である。法然上人に遇い奉りたが即ち弥陀の本願に遇ったということである。

親鸞聖人は「弥陀の本願まことににおわしまさば、釈尊の説教虚言なるべからず、仏説まことににおわしまさば善導の御釈虚言したまうべからず、善導の御釈まことならば法然の仰せそらごとならんや」というて居られる。本願も念仏も師教も、皆唯一念仏である、これを信する聖人はひたすらに念仏して居られた。歎異抄に「持ち易く称え易き名号を案じ出したまいて、此名字を称えんものを迎えとらんと御約束あることなれば、先ず弥陀の大悲大願の不思議にたすけられまいらせて、生死を出ずべしと信じて念仏まうす」というてあるも、また自然法爾章に、

南無阿彌陀仏とたのませたまいて迎えんとはからわせ給いたるによりて、行者のよからんともあしからんとも思わぬを自然とは申すぞとききてそうろう。

というてある。その教の如く念仏して本願を信する有様を

弥陀の名号となえつつ、信心まことにうるひとは憶念の心つねにして、仏恩報ずるおもいありと仰せられてある。この念仏は彼の仏の本願に順ずるところの道である。仏の本願は即ち南無阿彌陀仏の大道で、これを説き広げたが一代仏教である。そこで一代仏教は仏の本願に出でずである。十方諸仏出世本意として説くところの法である。十方の諸仏というは、弥陀仏の第十七願から顕れ出たためうのである、その根本たる弥陀大悲の誓願をいま利他の願海と歎美するのである。

教行信証の行巻に曰、「他力というは如来の本願力なり」と。如何にも力強い言辭である。ややもすれば仏教には数多の門戸がある、これを大別すれば自力と他力である。自力で進み行くはまことに立派な道であるが、我々は力およばねばよんどころなく他力に就くのであると思うものもある。これは自力を捨てて他力に入る有様であるが、絶対の他力に入れば本願以外に自力の存在を認めぬ。

前にも云うた如く、他力という言葉辭を誤解して、次の如く思っているものがある。自力ではとても駄目であると思き詰って苦しみの余り投げやりにして、どうなりと成るようになるであらうというて居るのが他力であると。だがそれは半途で疲れて坐りこんで居ると同様である、他力どころか無力である。そのように何時まで坐って居ても力が出て来ぬから、何時かまた立つて、自力でやって行こうとする、何事も仏のなさしめたまうのであると覺悟しても、その力がない。そこでこの次は他力によりて活動せんと試みるようになる、多くは向うの方に物を見ておいて、それを目的として、こちらから自己の力でやる。神なら神の意志に従って自分が実行していく目当に従って真剣にやって行く、大いに倫理力行に出ずる。それは他力の杖によって実行していくので、坐りこんで居るよりは力があるが如く見えるのであるが、向うは目当で実はこつちで運ぶのであるから、純粹の他力でない。

そういう人の考では自力の宗の中にも他力なきに非ず、他力宗にも全く他力のみということはあるべき筈がない、既に信仰というも自己の心に信するのである、何ぞ純他力ということのあるべきや、とこういう理屈から云うのである。この如き他力は半自力半他力である。然らばそれで成し遂げられるかというに、目的の理想はいよいよ高くして

実行の力がいよいよともなわぬ。他はますます高く、力はますます不足するから、如何にしても及ぶことが出来ない。譬えば、左足を船に、右足を陸に置いて、船は走らんとするが如くである、倒れざるを得ない。今親鸞聖人の他力というは、無力にもあらず、自力の足らぬところを他力で補うてもらうにもあらず、全く船に乗り込んで船の力で行くのである、仏の願力に全托して願力自然の運ぶにまかせて、此人生を実際に送ってゆくのである。だから順境にも逆境にも従容として常に仏の恵みの有難いことを喜びつつ人生百年の後かの涅槃界に到らせて頂くのである。仏陀を理想にして歩をはこぶかわりに願力の船に托してどんどん進んで行く。孝行は親を目当に此方から運ぶでなしに、親の恵みで自然に出来るのが孝行であるから孝行は全く親の念力である、他力は絶対の本願力である、到るところ仏陀の恵みのみである。小さい人間のはからいをもって、個人が真剣でやるとは同日の論でない。

その他力のことを今ここに利他というはそもそも何故であるか。この言辭については大いに味うべきことがある。

親鸞聖人は証卷の終りに、

宗師は大悲往還（おうげん）の回向を顯示して慰懃（いんぎん）に他利利他の深義を弘宣し給えりと歎詠せられた。その他利利他というのは如何なること

かというに、聖人の述作せられた入出二門偈に、

願力成就を五念と名づく、仏よりして言えば利他というべし、衆生より言えば他利というべし、当に知るべし、まさに仏力を談ぜんとす

と云うてある。これから見れば仏陀自ら行える仏の慈悲の塊の成就を人に与えるのが利他である。仏から云えば利他というべきである、他の衆生を利樂するのであるから。それを利樂せられる吾人の方から云うと他利というべきである、他の仏に利せらるるのであるから。そこで他利というも利他というも内容は同じものではあるが、言辞のたて方に左右がある。今ここに物があつて、これを引上げるのに、物から云えば他に引き上げられたと云うべく、力から云へば引上げたと云わねばならぬと同じことである。今こゝは仏願力を云わんとするところであるから、利他というが大いに明確である。

かの他力という言辞を誤解して無力と同一視したり、或は半自力半他力におちいる原因は、自己を本位としていて仏陀の偉大なる力が見えぬからである。もし他力の力が願力であると気づけば直ちに飄然（ほんぜん）と自力を捨てて全然仏願力に乗托することが出来る。

仏の方から引上げて下さる利他の力を知らずに、口には他力を言いながら自力の回向発願が離れぬゆえ、半自力半

他力におちいるのである。このような理由があるから、他

利の言よりは利他の言を用いたのである。勿論他利というは他に利せらるることなれど絶対の力はあらわれ、利他という方が一層力強く、かつ明確である。しばしばいうように信仰の極致は一大転換であつて、他力回向の真味はここにあるのである。これをよくあらわすは利他の二字であるから、親鸞聖人は大いに歎美して、他利利他の深義といわれた。このように天下を覆うの光、大空を覆うの雨の如き偉大なる利他の本願、これを海の如くたとえて利他の願海といったのであります。

親鸞聖人はさらにこれを歎じて一乗海という、善人でも悪人でもことごとく入れてしまふ、光は何物をも照す、海の河川の水をえらばぬ如く、あらゆるものを皆入れてしまふが利他の本願の海である。仏一代の説法はこの海を説くためにあらわれて来られたのである。利他の願海、一仏の名号、この偉大なるもの即ち仏陀である、即ち大行である。それであるから行巻には聖道万行自力諸善は皆小なる凡夫のはからいである、この南無阿弥陀仏は絶対の善であると沢山の対を出してある。曰く

然るに教について念仏と諸善を比較対論するに

難易対 頓漸対 横豎対 超涉対 順逆対 大小対
多少対 勝劣対 親疎対 近遠対 深淺対 強弱対

重輕対 広狹対 純雜対 徑迂対 捷遲対 通別対

退不退対 真辨因明対 名号定散対 理尽非理尽対

勸無歡対 無間々対 断不断対 相統不統対 無上

有上対 上々下々対 思不思議対 因行果徳対 自

説他説対 回向不回向対 護不護対 証不証対 贊不

讃対 付属不付属対 了不了教対 機堪不堪対 利

不利対 自力他力対 有願無願対 撰不撰対 入定

聚不入対 報化対 あり。この義かくの如し。然るに本願一乗海を按ずるに円融満足、極速無碍、絶対不二の教

なり。

此の如く利他の願海を絶対なるものであると言い切つてしまつて、これを受け来つた機、即ちその本願を信じたる信心は、また従つて絶対不二の信仰である。これを其次にまた機について対論するに

信疑対 善惡対 正邪対 是非対 実虚対 真偽対

淨穢対 利鈍対 奢促対 豪賤対 明闇対 あり、この

義かくの如し。然るに一乗海の機を按ずるに金剛の信心は絶対不二の機なり、知るべし。

とある。仏陀の恵のあり難いと喜ぶ信仰は、如何なることを為すよりも勝れてある、比較すべきものがない、絶対の大善である、大功徳である。歎異抄にも

しかれば本願を信ぜんには他の善も要にあらず、念仏に

まさるべき善なきがゆえに

というてある。行巻にも色々の譬をもつて歎美してある。

たとえば大虚空の如し、諸の妙徳、広大無辺なるが故になお大車の如し、普く能く諸の凡靈を運載するが故に。

なお妙蓮華の如し、一切世間の法に染せられざるが故に善見樂土の如し、能く一切煩惱の病を破るが故に。なお利劍の如し、一切憍慢の鎧を断つが故に云々。

皆利他の対力から出て来ている。

かく云えばとて人生を飛び離れた如く思うてはならぬ、この偉大なる力は始終我々に向つてある。行巻に我々の信仰をあらわした婦命の二字を、聖人は如来利他の手元において釈して、本願招喚の勅命なりと云うに臨んで、先ず字訓をもつて釈される中に、命の字訓に「計也はからうなり」とある。これ他なし信仰上のことは一つも我等凡夫の自力のはからいに非ず、皆広大なる仏の方からはからわれるのである。親鸞聖人は晩年に及んでますますこの事を深く感ぜられて、常の法語みなこの義を盛んに語られた。これは我が力では駄目だと物事を捨てやることでない、仏は種々無量に善巧方便して我々を導いて遂に我等にお慈悲を届けて下さる。彼の自然法爾の章にも

弥陀仏の御ちかいのもとり行者のはからいにあらずして、南無何弥陀仏とたのませたまいて迎えんとはからわ

せたまいたるによりて、行者のよからんともあしからんともおもわぬを自然とは申すぞとききてそうろう

と云うてある。然ればこの如來の御はからいは、我々を淨土へ迎えとらんと不可思議の御はからいである。我々に仏陀の恵みを届けようという廣大の御はからいである。この如來の廣大のはからいが即ち利他の願海である。これに對して我等が善からんとも悪しからんとも思わぬをば自然とも他力とも云うのである。かくの如く絶対の御力が我々の上にうつつて來るところは何とも云うて見ようのないあり難い点であつて、親鸞聖人も云うても「云いきれぬから、終に歎詠の言葉となつてあらわれ來つた。これが彼の正信心仏偈であります。

そこで正信偈の前に彼の天親菩薩の淨土論のはじめにある、世尊我一心帰命尽十方無碍光如來とある啓白文を積されてゐる曇鸞大師の論註の文を引用されている。これは前にも一度引用した文である。

即ち天親菩薩が先ず世尊の父を呼びあげて、其自誓（じとく）を告白したまうのは、あだかも孝子が父母に歸し、忠臣が君后につかえるのに、一挙一動、出處進退、一つとして私をまじえず、何事も皆君父のはからいに従ひ奉るが如く、天親菩薩も全く尽十方無碍光如來の極まりない大悲の母の光明の懷に攝取せられて、信心歡喜の胸中を披露し

求 道 の 中 心

妙法蓮華經と大無量壽經

この法華經は実は私は二十四歳の春、始めて読んで、その次には四十五歳の夏であつたか、法隆寺で佐伯定胤殿下から、聖德太子のご註釈による法華經の講義を聞いて、それから始めて法華經というものが、すこしわかり始めたのである。それまでは法華經を読んだといつても、お譬話が面白いくらいのところまで済んでいたかと思われる。そういうことであつて、もともと親尊のお蔭であるけれども、直々には近角先生のお蔭で、だんだんこの私が親鸞聖人のみ教えの道の大事なところをわからせられてきたのである。

もつともそれだから、その時から私が一方では女性への迷いが醒めはじめ、一方では親というものがわかり始めたというのはその時からで、お前は真人間になつたらうといわれるかも知れないが、決して真人間になつていなかった。あいかわらずこの煩惱熾盛の身であつて、だんだん五十歳が近づいて行くということになった。

ところが、この五十歳を越えたところから私の心が、少し

て、如來のもとに告げたまわずには居られぬのである。即ち恩を知りて徳を報ず、理よろしく先ず啓すべしとは、いかにもよくその哀情を言いあらわされた。又、所願輕からず、若し威神を加えたまうにあらざるば、はた何をもつてか達せん、神力を乞加す、ゆえに仰いで告ぐと、いかにも如來直々に威神力を加えたまうことを適切にしめしたまうた。聖人が信巻に如來の加威力によるが故に、大悲広應の力によるが故にと申されたのも、つまりこの直々の加威力である。今天親菩薩の帰命尽十方無碍光如來と申されたは、かくの如き忠愛至孝の至情よりあふれたる感謝の啓白で、加威力を歡喜讃仰したまえる告白である。聖人が帰命というは釈迦彌陀二尊の仰せに順い、召しにかなうと申す言なりといわれたのがこの点である。天親菩薩がかく如來の下に啓白したまう如く、聖人も仏恩の深遠なることを讃仰して黙することあたわず、先ず口を開いて啓白されたのが、帰命無量壽如來、南無不可思議光の御言である。而して願生偈に天親菩薩が淨土莊嚴を讚歎したまう如く、聖人はその讃仰隨喜したまえる大聖の真言、大祖の解釈の骨目を諷詠して自己の信念を告白したまい、最後に、道俗時衆共同心、唯可信斯高僧説と結ばれたのが、六十行、一百二十句の正信心仏偈である。

福 島 政 雄

明るくなつてきた。というのは、それまでの私は、仏教のお話をするというような時でも、大抵自分の煩惱の話ばかりであつたのである。ところが、少し明るくなり始めたというのは、親鸞聖人への親しみ始めにおいて、私の心にかくひびいた聖人のお言葉は、

悲しいかな愚禿親鸞、愛欲の広海に沈没し、名利の大山に迷惑して、定聚の数に入ることを喜ばず、真証の証に近づくことを樂しまず、恥ずべし痛むべし。というあの「信の巻」のお言葉である。これから始まつているのであるが……。

それからお經の上でいえば、大無量壽經の下の方の悲化段から五惡段、ことに五惡段というところが私が大經に對する感じ始めである。その始まりは、二十七歳の三月十一日の晩であつた。

その時、その一週間ほど前から母が、郷里の熊本から東京まで、実に三百里という道をのぼつてきて、私の結婚問題を決めるために來てくれたのだが、ところが、私自身は

小さい時から、母から非常に可愛がられた子で、母親がそんなにしてやって来れば、飛びたつほどに喜ぶべきはずであるけれども、一向喜ばなかつたのである。

というのはやはりその時も、前の年に親鸞聖人のみ教えに心が開けはじめたといながら、親に対する隔て心というものがまだある。つまり結婚について自分の思う通りのことをなかなか母に云えなかつたのである。それでその時十一日の晩、友人のところに話に行き、遅くまで話しこんで、友人にも自分の心持を打開けることも出来ず、たしか夜の十二時頃かえつてきた。小さな家を借りていた。母は隣りの部屋でもう休んでいる。私は小さなお廚子の扉を開いて灯明をあげて、浩々洞出版の真宗聖典をぱつと開いて、開いたところを読み始めると、それが大経五悪段の第五の悪というところであった。

ご承知の通り、この世の中には悪い人間がおつて、すっかり怠けてちつとも家業に精を出さない。父母が見るにみかねて、お前はそんなありさまではいけないではないか、少し真面目になつてはどうかという、子供の方では眼をいからせて怒り、おこつた眼つきをして、その親に対して口返答をする。そういう子供というものは親子といながら仇敵のようなものである。子はなきにしかず、子供がない方がよいようなものである。とあるあそこを読み

る。そして五十歳で広島から満州に飛び出して、満州に行くときには自分は仏教というようなことをちつともいわないで過ごそうと建国大学に行ったのである。仏教の仏の字もいわないでおこうと思つていつたところが、その建国大学学生のうち四人ばかり念仏にご縁の深い青年がいて、これが私のところにやつてきて、一つ大無量寿経を話して下さいというものだから、それでは大無量寿経の話をしようということになり、始めた。

初めは別院の部屋や本堂を拝借したが、後には私の官舎で話をするというようなことで、青年達が十人余り集つて聞いてくれたし、私も大分調子が乗つて、凡そ二カ年ばかり大無量寿経のお話をつづけて下の巻の途中までいったのである。

そういうことをやつている間に、大無量寿経については今述べたように、最初は悲化段、五悪段に感じて、上の巻の方は一向心に感じなかつたが、下の巻の悲化段から五悪段に入つて大変私は心打たれたのである。

噫無情 (レ・ミゼラブル)

それは自分はやつぱりジャン・バルジャンのようなものだということを感ずるようになった。それはつい二・三年前にも改めて「噫無情」をくりかえし読んでみたが、それを通読すると、あの終りのところで涙が出そうになる。

始めて、その時はじめて、はあこれは自分のことだと感じたのである。それから第五悪をずつと読んでいくと、あそこには深刻な人間の罪惡が述べられてあつて、そのおしまいに近いところに、よき人はよき行いをして明るい世界から明るい世界に入る、悪い人間は悪い行いをして暗い世界から暗い世界に入つて行く。誰も知るものがないかもしれないけれども、仏さまはこれを知ろしめすのであるというあそこところを読んでいくと、すつかりたまらないようになって、ご仏前に泣き伏してしまつた。

そうすると不思議なことには、その時から私の心が親に対して開け始め、あくる日になると母に対して自由にもものがいえるようになっていた。そうして、それから後は私が考えをいう。母も考えをいうようなことで、五ヶ月のうちに私の結婚問題を母親がきめてくれたのであつた。不思議なこと、なかなか煩惱の私なのである。

心の明るさ

私が五十を越えてから、少し心が明るくなつてきた。というのは、これは親鸞聖人のお言葉では大悲の願船に乗じて光明の広海に浮びぬれば、至徳の風しずかに衆禍の波転ずというあの行の巻のお言葉であるが、それを前から読んでいたけれども、それが少しでも自分の身に沁みてなるほどと感ずるようになったのが五十歳を越えたところからであ

というのは、ジャン・バルジャンが、さんざんひどい目に会つて、世の中からかくれかくれて、おしまいにあのユゼットという娘を自分の娘のようにして育てる。しかしそれが年頃になつてから、マリウスという青年に与えてしまふ。それから以前に事業をやつていた時に獲たところの財産もスツカリこのマリウスに譲つてしまひ、何もかも棄ててしまふ。そして、そればかりでなく、マリウスに疑いの目をもつて見られる。自分の貰つたところの財産はあれは不正な手段でたくわえたのではなからうかという疑いを受ける。マリウスがユゼットと結婚するが、その育ての親のジャン・バルジャンとは往來をしないようになる。婿にあたるマリウスからも棄てられ、世の中からすっかり棄てられて、娘もとられてしまふ、何もかもなくなつて、そして最後にミリエル僧正からあの時いたたいところの銀の燭台にローソクを立ててともし、その前で祈りをこめるといふのが、あの最後の場面であるが、あそこまでくると、私自身がジャン・バルジャンのようなものであるということを感じると同時に、あのジャン・バルジャンのために、また私自身のためにも涙が出てくるのである。

實際人生というものはこういうものであらう。自分の大切だと思つていた財産も人間もみんななくなつてしまつてそしてたった独りで、ジャン・バルジャンの場合では、ミ

リエル僧上の追憶を通して神とジャン・バルジャンの問題になる。神の心にジャン・バルジャンが祈りをささげている、ということになる、やはり人生というものはこういうものであり、自分というものはこのジャン・バルジャンのようなことをやったのではないけれども、心根は同じであるということを感じるのである。

この小説が私に大事な親鸞聖人のみ教えをうける上に大きなご縁になっている。一切を捨て一切をささげる、そのところにただ残るものはお念仏であるという感じに強く打たれるのである。

カラマゾフの兄弟

それから、もう一つはドストエフスキの最後に書き上げたという「カラマゾフの兄弟」というあの小説である。私最初に読んだのが三十歳を三ツ四ツこえたところであつたと記憶するが、これは日本訳で読んだのである。

最初にあれを読み通した時に、どういうことを感じたろうか。まず自分の姿をあの小説の中の誰にうつして感ずるかということになると、あの三人兄弟の一番兄のドミトリというかミーチャとよばれている、あれにこう自分の姿がみえるように、その時は感じた。ドミトリは乱暴な息子で、父親と一人の女を奪い合うようなことをする。そして始終、親爺を殺す殺すという。実際に殺したのではない

が、いつもこんな乱暴な言葉をはく。このミーチャに自分の姿を感ずるという風であつた。

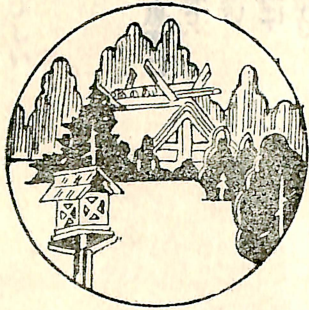
そのころ、広島のお坊さんに「私はこの小説を読んで自分の姿を、このドミトリ・ミーチャに似ているように思いますが」というと、そうするとこのお坊さんは「そうではないでしよう、あなたはこの一番末のアリョーシヤ、非常に純真な青年、このアリョーシヤでないでしようか」といわれた。そういわれてみると一寸よい気持がするのだけれども、決してそうじゃないので、とてもアリョーシヤのような純真な青年にはなれないのだった。ドミトリだ、ドミトリだといっていた。

ところが今度六十歳近くなる頃からあらためてこの小説を読みかえてみると、どうなったかというと、あの中で一番いやな人間、三人兄弟の父親であるフョードル・カラマゾフ、これは私読んで「これは一番いやな奴だ」と感じるの、もう老人になって顎の下にひどい瘤がぶらさがっているし、見るかげもないありさまになっているけれども、女に眼がなくて金をためて、お金で女を左右してやるというようなことを考えているのだ。そして長男とも争う。そういう一番いやな人間であるが、自分の姿というものが、この老カラマゾフの上に見出される（もつとも私がお金をためて、女を左右しようと思つてはいないが）しか

しどうもそういう人間の感じである。

まあそういう風に変ってきて、つまりいよいよ自分のみにくい姿というものが、年齢とともに深刻に見えてくる。見えてくるというのは、これはやはり親鸞聖人のみ教えのお蔭なのであるか。自分はフョードルのようなことを無論やりたくないし、そういう境界を切抜きたいものだというような心持はもっている。しかし自分の現実の姿というのは、ちょうどフョードルによってあらわされているようなものであるということを感じるのである。そういうことを一方感じながら、心は少しずつ明るくなっていくのである。

『読書と教養』序説より



求道用心集

源通寺

信不具足 聞不具足

私はかようかように聞いたと心得て居るのが聞不具足また、かようかように思うて居りますとすまして居るのが信不具足

蓮如上人は「信心不足々々」と仰せらるる

何が足らぬ。此方にいろいろと思ふのが不足じや。

聞きざして安堵のなるのが御回向の信心じや。

ほけても 狂うても

我は近頃、大分ほけた様なり。法話拝読しても、人と話しても、あたかも蓄音機のごとし。恐ろしきことなり。つとめて仏前に出でて念仏せん

宿業でたといほけても狂うても

たがえたまわぬ弥陀の約束

辞世

定散のかざりをすててまるはだか

ただ願力にひかれぞゆく

念 仏 詩 抄

木 村 無 相

如来不思議に

凡夫の思議で
助かるでない
如来不思議に
助けられるの

聖人御せに

〃弥陀の誓願不思議に
助けられまいらせて
往生をばとぐるなり〃
凡夫の思議で
助かるでない
如来不思議に
助けられるの

ナムアミダブツ
ナムアミダブツ

聞かねばならぬ

聞かねばならぬ
聞かねばならぬ
聞かねばならぬ
〃ひとえに
往生極樂の道を――〃

親鸞聖人・歎異抄に

〃ひとえに
往生極樂の道を
とい聞かんがためなり〃
と――

この中心をはずさず
聞かねばならぬ
聞かねばならぬ
ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

きびしい

きびしい
きびしい

実にきびしい
〃兎の毛 羊の毛の
さきにいる

ちりばかりの罪も〃
お見のがしない――

そうであるのに
愚かなわたし
お目をごまかし
とおせるつもり
その愚かさも
お見のがしない――

きびしい

きびしい

お念仏はきびしい

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

ひとえに

親鸞聖人・歎異抄に

〃ひとえに
往生極樂の道を――
といきかんがためなり〃
問い聞かんがためなり
問い聞かんがためなり

問うこと 問うこと
問うこと 問うこと
ひとえに

往生極樂の道を――

道を 道を
道を 道を
問い聞くこと――
問い聞くこと――
問い聞くこと――

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

南無の二字

南無と聞いたら

もう安心だ

オヤの廻向の
南無だもの

オヤの苦勞の

カタマリこそが

ナムアミダブツの

南無の二字

凡夫の苦勞にや

用がない

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

そこで聞く

弥陀の願心

ナニに聞く

ナムアミダブツの

み名に聞く

〃弥陀の名号

となえつつ〃

弥陀の願心

ソコで聞く

池山寿夫様のことども

川 畑 愛 義

池山寿夫様が亡くなられたという悲報を西元宗助さんから電話で聞いた時、私はなんとも云えない重い気持ちにおちていました。後から考えたことですが、そのとき二重の悲歎にとざされたようでした。それは寿夫様の御逝去をいたむ胸の悲しみがさきたつたのですが、もう一つその奥に、池山栄吉先生の面影（おもかげ）を見失うような淋しさも含まれていたようでした。

御父子の間柄とはいっても、それほど池山寿夫様はお父様の栄吉先生にそっくりでいらっしやいました。私など寿夫様にお目にかかっている時、ふと栄吉先生に会っているような錯覚になることさえありました。

それから、今から考えてみても寿夫様が、身体的にお父様に似ていらしたというほかに、人間的にも、思想的にも、そして信仰的にもほとんど同じような立場と境涯におられたのではないかと思われまふ。

その実、私は寿夫様とそれほど長くおつきあいを願ったこともないし、また格別の御親交に恵まれたこともなかった。

〃聞其名号
信心歡喜〃
み名をはなれて
信心なし

ナムアミダブツ
ナムアミダブツ

安心

〃弥陀の名号

となえつつ〃

其の名号に

願心を聞く――

それよりほかに

安心なし

〃聞其名号

信心歡喜――〃

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

たのですが、お父様の栄吉先生の長年にわたる御訓育のたまものとして、私は寿夫様に対してもただならぬ敬意と親愛の情をひそかによせていたようです。寿夫さんにお父様ゆずりの厳しいヒューマニストとしてのバックボーンの上に、静かなやさしさと暖かい思いやりをいつも漂わせていたように感ぜられます。

私が今、寿夫さんとの思い出の糸をくってみる時、ペル1からの御帰国このかた、印象に残っているのは、やはり京都の浄住寺の秋の一道会の御縁でうけたまわった寿夫さんの御話から得たものです。その時には会員の皆様も御同様であったかと察せられますが、父上先生についての御印象や感想などを説き来り説き去る雰囲気の中で、その信味の格調は、あたかも栄吉先生の再現をしのばせるようなものがありました。

寿夫さんの今一つの印象として忘れがたいのは、NHKの名古屋放送局から、教育テレビの宗教の時間に、花田先生等と御一緒に出演をした時のことです。この時、寿夫さ

んは、たしか我身の暗さや智恵のおろかさに泣いたり、歎いたりばかりしないで、視線を上げて、さんさんと輝く大悲の慈光を仰ぎたいものだと思われました。

今や、池山寿夫さんは安養の浄土に還帰され、御父先生とともに、寂静と称名の中から、生の限り迷い続けている私達をやさしい微笑をもって御照覧されていることと拝察されます。

老骨のわが身ながら、池山栄吉先生その他多くの善知識の御導きにより「俱会一処」の信仰を味わせていただく因縁を有難く感謝したいものです。

おわりに最近のこしおれ一首を附記します。

池山寿夫様を憶う

去る九月十九日、東京の池山千代奥様から電話があり、寿夫様が肺炎で急逝されたとの御知らせをうけました。寿夫様は去る八月に突然たおれられて入院加療中で、段々恢復しベットの廻りをたすけられて歩けるまでになったとい

年長、七十四歳でした。奥様からの御依頼をうけ、法名を樹心院釈寿道信士と謹しんで撰してお送り申上げました。

私は大正十一年に六高に入りましたが、寿夫様はすでに東大文科に進んでいられたので、先生のお宅で一二度お姿をお見かけした位でした。戦後六十過ぎて高知から名古屋に移り、南米貿易商社の責任者となられてから度々お訪ねもし、小庵の法話会で「人間のいとなみ」とか「或日の父」とか「母を憶う」とか「父のことども」等々と池山先生の御長男として、先生の裏面から見られた信の旅姿を語って下さいました。このことは私には非常にありがた

いことで、仏心と凡心とが一体にとろけた信の生活は、つずれ錦のようなもので、凡心のもつ煩惱のぼろぼろをそのまま仏心に摂取せられて転悪成徳されますから、表は立派であるが、裏面はぼろぼろの糸の集合体であります。ところが外部からは綺麗な表面だけしか見えぬのに、裏面のことを詳しく正確に語って下さったことは、私の信の歩みに大切な指針を教えられたのであります。

さて寿夫様のことを誌そうとしますと、池山先生と清夫人と寿夫様のお三人が渾然と一つになって分けられぬ趣きがありますので「池山家の人々」とでも題を出したら適切な感もいたしますが、この点を御賢察下さいますように。

ひねもすを泣き笑ひつつ今宵もや
帰るわがやの 南無阿弥陀仏

(追記) 昨年の一道会には、アメリカ、カナダ旅行中のため出席できなかったので、今年こそは御同朋がたにお目にかかることをなにより楽しみにしていましたが、やむを得ない他の法縁で鹿児島に出掛けなければなりませんので心ならずも欠席します。そしてこの拙稿をお送りして、せめてもの責めの一部をふさぐことにしました。どうか会員の皆さまによりしく御鳳声下さい

昭和四十九年十月下旬、一道会を前に

花 田 正 夫

うお知らせで、ホッとしていましたのに、突然の訃報に驚き、つきぬ名残りが色々の愚痴となりやがてまた念仏に転じて胸中に渦巻いております。

寿夫様は池山先生の御長男で、六高の先輩で私より四つ

池山先生は御年四十二歳の時、大正二年に歎異抄の二章の有名な一句「親鸞におきてはただ念仏して云々」に永年の迷路を脱して念仏の人となられました。清夫人は五人の子供と老母を抱え忙しくもあったのですが聞法の心も希薄であった由でありました。ところが六正六年末になって胃ガンで手当のすべもない状態との宣告をうけられ、悲歎と絶望の底に陥ち入られた刹那、フト仏のお慈悲に気づかれ、ようやく氣をとりもどし、どんなにしたいところがやがては別れねばならぬ人生、永くそい遂げられるものでもなし、病氣が主人でなく、自分であって幸せだったと思われ

るようにゆとりある心が開けてきたのであります。それから家の中の者の着物の整理やら、身のまわりの持物や着物も売って子供達の物をととのえるなどされ、寿夫様に或時、「歯を治さないでよかったよ」と、死んで行く身に無駄金を使わないでよかったと語られたことが偉大な言葉として強く寿夫様の心に刻まれた由であります。

然し、当時数えの十九歳の寿夫様は丁度反抗期で、まだお母さんは若いし衰弱もそれほどでもないのだから、胃ガンと決ったものでもなし、もっと他の医師にも診て貰って手当をしたらいのに、父も母も駄目ときめこんで、仏様がありがたい等と云っているのに腹立たしささえ覚えられたそうでありました。

その寿夫様が年を越えて一月になるとお母様の衰弱が目立ってきて、本当にお母さんは死ぬんだな！と、母上の死を直感しはじめられました。この一月にかねて池山先生御夫妻の要望もあって近角先生に御願ひして法話を家で催されました。御縁のある人々は殆んど集まり、先生の御法話は、ことに歎異抄の九章の「よろこばぬ、浄土にまいりたい心のない者を、仏はかねて見抜かれて、その煩惱興盛の身をことに憐み下さる」一点を実例をあげてねんごろにお述べになりました。その時また清夫人はお元気で給仕なども喜んでして居られ、集った人々も、死が近いときいてるのにこの家には何処にも暗い影さえない、信仰の徳だなぁと感銘していたが、近角先生は、特に清夫人に向って

「奥さん今日は非常に喜んでいられるが、いよいよ最後となり、五人の子達とも別れとなると、こんな調子には行きませんぞ、念仏をよく平素喜んでいた向坊さんが撫順の炭坑の爆発の時「シマッタ」と叫んで人事不省におちた。早速色々手当をして息を吹きかえす時ナンマンダブツタタタで蘇りました。もしもそれで終れば浄土でしたが、どんなに平素喜んでいても、いよいよとなるとシマッタより外ありません云々」

と語られると、清夫人は

「他の人達は私の喜ぶ姿だけ見て感心だと云ってくれ

んに何もしてあげられなかったのに」と答えると、今度は鉄火の様にはげしい調子で「馬鹿だねお前は、子供にかえして貰おうと思つてする親があるもんですか、馬鹿だねお前は！」と叱責せられました。

この時のことを寿夫様は「悪い言葉は万物より深く人を切ると云うが、馬鹿！と云うぐらい悪語はありません、他人から言われたら腹が立ち深く心が傷つきますが、この時の母の「馬鹿だねお前は」の一語は愛情に満ちた力強いもので、私の全身が愛情に包まれました。そして六十年後の今日まで続いております」と感慨深く語られました。

そしてお母さんの亡くなられたあとになって、先生に、「お母さんから馬鹿だよときびしや叱られました」と話されると、しばらく念仏していられた先生が「馬鹿はお前だけじゃないよ」とポツリと云われた由であります。絶対の仏心に向つて、自分がよいのわるいの、すむのすまぬの、たすけられるのたすからぬのとはかたっている身を、仏様も「馬鹿だよお前は」と優しく、またきびしく呼ばれていると寿夫様は痛感せられました。

四月に入ると清夫人はぱったり床につかれました。その頃背中を寿夫様はよくさすられたのですが、寿夫様の内心は「いやだなあ、勉強もせねばならぬのにか、テニスの選手だったので、練習もせねば等々の思いが去来しずつめ

ますが、先生だけは今日こうして飲んでいる心の奥にひそむよろこぶ心のない、やるせない点を見抜いて下さつて、その煩惱の中にお慈悲をそそいで下さいまして、本當にらく／＼といたしました。腹水がたまつて非常に苦しくなると念仏も出なくなります、それで自分の往生には微塵も疑ひはありませんが、他の人、ことに子供達に信の上の障りになりはすまいかと案じていましたが、そんなことも無用になりました云々」

と、本願の頼もしさをいよいよ渴仰せられました。この会は文字通り、生別に死別をかねた法話会となりました。二月になり旭川の上流の吉備津神社の桃の花が咲いたと聞かれて、先生一家揃つて花見に出かけられました。その時、奥さんは先生に背負うようにされて、この世の最後の花見をせられました。寿夫様は寄り添うて花を見ていられる御両親の心中を察したまらなかった由でありました。

三月になつて学年末の試験で夜更けまで寿夫様が勉強されているとあまり寒いので炬燵のある部屋に入ると、家中の者は寝ているのに母上だけが起きておられたので自然にまともにお母様の顔を見られると、あまりに衰弱していられるのに心打たれて、母さんには涙は見せまいと決心していたのが崩れて、つい布団の上に涙でうつ伏せされた。するときびしい声で「寿夫、何だね！」と云われるので「母さ

で、本當に母の身になって背中をさすつたことはなかったのに母は何時も『ありがとう』とこころよく受けてくれました」と述懐せられました。

五月十三日に薬石効なく念仏の息絶え終りましたが、そのお葬儀の時、当日午前十時頃になると悔み客も多いのに先生は部屋の隅に屏風を立てさせ、その中に入つて出られず、読経が始まっても出られないので、そつと屏風の中を窺われるとハンカチを涙でもみくしやにして顔にあててうつ伏していられるのを見て、何も云えなくなつて、そのままお父さんに代つて寿夫さんが悔み客に挨拶せられました。火葬場にも寿夫さんが送られましたが「本當の母は父の胸の中で生きている」と途中で思われた由であります。

この様にお母さんとお別れになった後になって、重病の母の背中をさすることさえ長男でありながら心から出来なかつたことを思い「母さんは淋しかったろうなあ、一番親しい長男の自分さえ頼りにならないのだからとたまらなく思つたが、それがそのまま、こんな心でいる自分は誰にも頼る資格もなく、頼る人もあるまい、人生は本當に一人ばちちだなあ！」と反省せられ、かといつてあさましい心をよくすることも出来ず、永遠に孤独な身、どうして見ようもないと行き詰つた時、寿夫様の心を打つたのは

「母がよろこんで阿弥陀様のお膝に抱かれて死んで行った。一人の生命が淋しく死んで行く時に、このままでは私は阿弥陀様の所へ往けるんだよ、心配しなくてもいいよ」と云った、これは事実です。その時、親鸞におきてはただ念仏して弥陀にたすけられまいらずべしとよき人の仰せをこうむりて信ずる他に別の子細なきなり」の言葉を父から重ねて云われた時に、そうだなあと思った。私は母と一緒に、母の道を行こう、間違っていたといい、それこそ「たとえ法然上人にすかされまいらせて云々」のお言葉通り、間違っていたって私の母が行った道なんだ、その道を自分は行くと、私はいただいてるんです。

ほんとに一人ぼっちだと思った私は一人じゃありませんでした。嬉しい時も、悲しい時も必ずそこに母が、父が、阿弥陀様が、皆一つになって一緒に暮す生活は一人じゃない、一人だけれど一人じゃないと思います。

あとで父に、人生は一人ぼっちですね、と言いました。「そうだ一人ぼっちだよ、だがね何時か一人じゃなかったと気付く時があるんだよ」と言ってくれました。長い間父や近角先生が弥陀の絶対の慈悲を説かれても、阿弥陀様なんて何処に居られる、居るかいなか解りもしないのにいい加減に思っているだけじゃないかというよう

な心でいたのが一変しました」

寿夫様の心はこのようにして開けました。その頃、五人兄弟が枕を並べて寝ている部屋に先生は机を置かれて、歎異抄のドイツ語訳をしていられ、時々、マアこうしておかね、少し変かなあ！など独りごとしながらペンを走らせていられた由です。

又、その頃、お母さまが不治の宣告をうけられてから、末子の添寝をその日からやめ、十五のらく子さまの寝床に入れ「お姉さんとおやすみ」と甘える御子を邪慳なまでにつつ放し、夜のおシッコも、朝の着換えにも一切手を借さなかったのですが、その時のお母さまの気持はどんなにあったろうか、残りすくない生命となれば一日でも長く子に添寝してやりたいのが凡情でありますのに、抱いて悲しむ涙よりつつ放しているお母さまの衷情をしみじみと思われたのでした。お母さまのようにしたい等と始めは思っていたが、それは間違いで「子の立場で母の心を仰ぐ、自分は母親じゃない子である、その立場を忘れてはかえって母の涙が感傷の資材に終る」と反省せられました。

さて話があとさきになりますが、寿夫様が忘れ得ないことの一つに、岡山中学の一年生の頃あまり勉強しないで落第しかかった時、三学期に字書のまる暗記などしてやっと進級した日、先生と一緒に岡山の後樂園の散歩に行かれま

した。その時、八木教授（中学と六高を兼任した先生）が通りかかって、中学の服を着ていた寿夫様を指して、この子供さんとは聞かれると、先生は私の長男ですと胸を張って答えられた。すると八木教授は、あなたの御子さんでしたか！としげしげと寿夫様を見られた。というのも及落の職員会議に寿夫様が出されて間もない時とて、八木教授の印象が深かったのです。この時、父の先生は、一向に恐縮する様子もなくさりと私の長男ですと答えられた態度を見られて、それが頼もしく感じ、それから人並の勉強もするようになった由であります。

寿夫様が二十八歳の時に南米のペルーの知人から是非来るようにと招かれ、出発せられましたが、船が米国に着いた時、自分を招いてくれた人が急死した報せがあり、人生の最初の門出から大きなショックを受けられました。

ペルーでは日本語学校やら、朝日新聞の通信員やらをしていられました。ところが昭和三年に池山先生が再婚なさるという通信に「来し方の十年（ととせ）の冬をしのぶかなまた人生の春を迎えて」という歌も書き添えてありました。その時はじめは、父もいい気になって、と妙な気持ちになられたが、又繰返して読んで見ると、この歌は亡き母への語りかけで、母に、お前が亡くなって十年、五人の子

を抱えて寒い冬を越してきたよ、しかし喜んでおくれ今度縁があつて身の廻りのことをしてくれ、話相手になってくれる人が出来たから」という心だなと知り、浅薄な自分を愧じられたそうであります。

昭和九年、池山先生が大病になれましたが当時航空機もなく、帰れなかったのですが、十一年夏にはじめて見舞をかねて帰国され、半年先生と同居せられました。帰宅されるお前お金は持っているかね、と先生が寿夫様にたずねられました。当時としては可成り十分な金を用意されていたので、その事を話されるとそれなら安心だとしてよろこばれたのでした。長い間清貧の生活を続けられた先生は、そうしたお心遣いがあつたようであります。

その時、友子奥様に「長い間長男の私が父のもとを遠く離れ、幸吉は死に、敏朗も側に居らず淋しい父を私に代ってよく慰め力になって下さいました」と御礼を云われ、又友子奥様の妹様の現在の千代子様と結婚されて、二月に再び渡航されました。その日、信国さんや川畑、東の学兄もお宅に伺っていられたのですが、家を出られるお二人に「じゃあ行っておいで、二人仲よくして」とと先生が言われると「お父さんも健康に氣をつけて」ととあっさり挨拶をかわして若い二人は出られました。その日、時が経つにつれて「今頃は逢坂山をすぎているかな」とポツリと先生

はつぶやかれたのに信国さんも心うたれたのでした。その日はおそらくまんじりともされず、時計を見ながら心で寿夫様を追っておられたことでしょう。「紅梅を見せで別れる恨かな」とか「逢うてまた別れる日なり今日よりはまたのあう日のめぐりそめける」と詠じられたのもその感懷でした。

昭和十三年十一月に先生は亡くなれましたが、遠いペルーからは帰ることが出来ませんでした。その後戦争は拡大し、太平洋戦争となった時、報道関係にいられたので早速北米のテキサスの収容所に入れられて一年半ばかり過ごし昭和十八年に交換船で日本に送りかえられました。その時四十六歳でした。敗戦後は高知の山奥に開拓団に入って農耕をして六年間すごされましたが、御子達の教育の關係もあって、高知市で仕事を見出し十年間を送られました。

昭和三十八年に、南米貿易の名古屋支店の責任者として移り住まれましたので、京都の一道会にもお差支えのない限り出席され、私の小庵でも時々感話をして下さいました。そうしたお話の中で「父は人様からは悠々としたおだやかで静かな人間と見られ、愚痴も漏らしませんでした。父ははげしいものを持っていて、母の葬式の時のような面が沢山あってそれがそのまま御一緒して下さる方

の心によって完全燃焼されて念仏とあらわれたのでした」と、話して下さいましたが、先生御自身が「氷がとけて水滴がしたたる音が念仏だよ」と仰言ったことも思い併せました。寿夫様が「煩惱の完全燃焼」という言葉を使われたのが心に刻まれております。

又「父や母のことを語って一角知ったか振りをしますが本当はわかっていないのです。京都の一道会で信国さんに会った時、ペルーに行った時の父の話をきいて始めて父の年も過ぎてそうした父の心を知らされましたが、まだ私の知り得ない父の心が無数にあると思います、これから何かの機縁からすこしずつ知らされることでしょう」と語られましたのも私共への大きな指針となりました。

さらに何時のお話の時でも云われたことは「父は死んだと思いません、隣りの部屋で好きなお茶でも喫していると思えません。私は一人ぼっちだなあと思うとすぐ父や母や阿弥陀仏が「一人じやないよ、いつも一緒にしているよ」とあらわれて下さいます」と、全く一つにとろけた、心と心の交いは、時間も空間もまたげることが出来ない趣きを持たれました。阿弥陀経に俱会一処（ぐえいっしょ）とありますが、文字通り、池山先生と清夫人と寿夫様が俱会一処してこの世から歩んでいられました、その自然として浄土に一処して居られるのであります。南無阿弥陀仏

高原憲先生聞書

転悪成善の益

「雑草を抜いてそのままこやしかな、とよく云われ、又鉄がそのまま磁石に転じることもよく知られることである。妍を競って咲き乱れる花の陰に根を下している雑草、道端に埃にまみれ、いつ人に踏まれても省みられない雑草。これが自分であることまでは一応判っても、矢張りきれいな花を咲かせる草花でありたいのは人情である。然しながらどんなに願っても雑草は所詮雑草である。」

何とかしてすっきりしたい、何とかならぬものかとその切なさに身のおき場もないように何時も高原先生に訴えました。私はお話をうかがうとパッと目が開いたように明るくなり、それからは前と違って胸を張って歩ける私になれろと思っていました。これは誰もが考えます、苦が大きければ大きいだけ早く楽になりたい、明るくなりたい。そして信仰を得れば明るく楽しくなるだろうと思いますが、却ってこの考えが自分自身を苦しめたのです。だが問屋は仲

平岡坦

々そんなに安くは卸してくれません。

「変わるものではない。変らぬままに変わるのだ」と先生は仰言る、そのお詞に多少うなずけるようになるまでに相当時間がかりました。しかし矢張り、もっと要領よく、もっとうまくやれる人間になりたいと云う私の焦る心が、何時までも先生から見られると、それがあらわに出ていたのです。君は変ろう変ろうと考えている。変ってよくなろうと思ってもよくなれるものではない、君は転悪成善の律法主義だ。これでは駄目」と再々たしなめられました。判りました、今はもう変ろうとは考えていません、と申しました。そこで先生は卒業証書を仲々下さらないのです。そしてその証書がないと駄目と思っていることの間違いに気付けなかったのです。そして「判らないく」といっている私に「貴方は無能力者だ」と先生は仰言ったのであります。

ここまで来て、いよいよ私は腰くだけ、取り着く島を失

ってしまいました。先生に見放されても困るし、さりとて何処から取りついてよいのか、判ったような顔をしてお話をうかがっているものの、内心この一点に先生とのへだたりをもっていては私としては心底不安な気持は少しも取り拂われません。

「見て御覧なさい、氣狂い程氣楽なものはない、何も苦にすることもなさそうにヘラヘラ笑っておる。変ろうと思ふなら氣狂いになりなさい、氣狂いになれば貴方が思っている所に行きつく」と、全くひどいことを云われるものと怨めしく思いましたが、先生をごまかすことも出来ません。ごまかし得ても私自身がどうにもやりようのないことに変わりなく、進退極まったのでありました。

「求める心が先に走っては反って判らなくなるのだ。あせっては駄目、力む心が求める心を邪魔する。求めるものではない、与えられているのだ」私が先生にお目にかかる度に、判りません／＼の一点張り、時には「先生、私は一度でよいから如来様にお会いしたい」と申しますと先生は「平岡さんは幼稚園の子供ですね。幼稚園児にどんなに教えても恋愛は出来ない。思春期が来れば自然に好きな相手をつけます。それと同じで御縁が熟するのを待つより他はありません、ただ聞くことです」と静かに仰言ったこともありました。

効に使う。

この世は、人生最大の目標を与えてくれる砥石である、砥石は荒目ほどよい。

瘤をつくれ、痛い瘤がよる／＼に変わる、だから娑婆を忍土と書く。」

先生の『水の味』に転悪成善の益と題する一文あり、逐に跛（ちんば）になった少年と少年の跛になった脚一本に命をかけてきた母親について、直らぬ跛となった時、跛は跛のまま不自由な一歩一歩の中に、母の涙と血がにじんで来て、不自由な脚の中に母の御恩を仰ぎ、跛のまんま無碍道があるき、母子共に救われた姿がえがかれています。

又先生がよく云われたことでありますが「一切の相對するものの中に仏を見よ、縁となるものである」こうした自分をもつことが正しく人の心の変らぬままに変わった姿を仰言っていたのだと、今になって私は頂いています。

そして、その後知らされたことでありますが、これと同じことが第四十六願に、

「その志願に随いて、聞かんと欲する所の法の自然に聞くことを得る」

とあり、即ち「花は紅、柳は緑」の自然の姿の何たるやを知らされました。これを先生は仰言っておられたんだなと知らされました。

「耳の横でドンと大きな音がすれば誰だってびっくりする。びっくりしないのは狂人かつんぼだ。びっくりしたあと、それが太鼓の音と判って、ああ太鼓だったのかと落着くか、そこが問題なのだ、見てごらんなさい。

お百姓さんは畑の雑草を抜いても捨てはしない。そのまま畑に返しこやしにするではないか」と先生は仰言るのでした。そしてまた、

「磁石は見かけも、又これを分析しても鉄であることに少しも変りはない。然し磁石と鉄の違いは、磁石は必ず一つの決った方向を常に指す。これは一体どういうわけか。鉄と違う他の要素が入っているのでも何でも無い。唯、鉄と磁石との違いはその分子の配列の違いだけでこの様な違いが生じてくる、鉄のままで磁石になれるのである。

信仰が出来たからと云って何一つ変えることはありません。欲に迷い、腹を立てる、煩惱具足は少しも変らないが、唯、方向が決まるだけで、お浄土に向うだけである。我慢と我執の殻を破りなさい。面目（メンツ）を捨てるのだ。殻を破れば光が見える、破るのに見えるのは同時だ、殻を破って光の前に出なさい。

相手から投げつけられた石をそのまま直ぐ投げ返さず、一旦受け止めて、静かに反省する。自分だったらもっと大きい石を投げたであろうと。その後この投げられた石を有

大恩は謝せず

先生がよく言われた言葉であります、これは「感謝しなくてもよいと云うのではない。われわれは、思わぬ御恩を受けているのである。その御恩はあまりにも大きいのです、それに気付かずにいるのである。そして御礼を申し上げるようなことで相済むようなことではないのである。

夜路を行くのに手にした提灯に、提灯のおかげでとお礼は言っても、照らす月には誰も礼を云わない、否私が云わないのです」

と、この様に説明して下さいました。

私も先生の数々のこうした御手廻しの中にしみじみとこの大恩は謝せずの心境を教えられてまいりました。

白杵祖山老師の遺詠

大いなるめぐみの中にめぐまれて

めぐみも知らでめぐみに生く

これは、老師の直腸癌の最後の病床にあって詠じられたものであります。他力の廻向を、「めぐみによってめぐみを頂く」とも仰言って、頂くすべもしらぬ私共に、頂く心までをおこして下さることを知らせて下さいました。

あとがき

歳末となりました、御忙しいことであり
ましよう。師走の月は仏陀成道の日、近角
先生の忌日、そして太平洋戦争のはじまっ
た日、私共には忘れ得ぬことの多い月であ
ります。

近角先生の「利他の願海」は、教行信証
の行の巻の讃仰であります。私共のたすけ
とげられる唯一無二の願海、南無阿弥陀仏
の前行をお述べ下さいました。

福島先生は、仏智に照らし出される御自
身の有様をそのままにお述べ頂き、私共の
鏡を掲げて下さいました。

木村さんの念仏詩抄は、池山先生の特集
号で二ヶ月程誌上に記載出来ませんでした
が、これから順々と連載させて頂きます
京都の一道会に、一期一会の思い切に出席
されました。

川畑様は京都の一道会に差し支えがあつ
て欠席され、代りに「池山寿夫さんを悼
む」の法信を披露されましたので慈光に転
載させて頂きました。私は寿夫様が数年前
古屋に住まれ、時々拙庵でお話しして下さ
り、又、NHKの宗教の時間に川畑さん、
山田さんと御一緒に出させて貰ったりし
て、思ふはつきません、その間教えられた
ことどもを誌しました。

長崎の平岡坦様は、高原憲先生に親しく
導かれた方で、先生の亡くなられた時、聞
書を、聞思会で発表されたものでありま
す。お宅を開放されて月一回の聞思会を続
け、仏陀の徳光を皆様で頌合つていられ
ます。

〈新刊書紹介〉

仏と人

定価 一五〇〇円 送料二〇〇円

宿業の大地に立ちて

定価 一〇〇〇円 送料一六〇円

御消息集講讀

定価 二〇〇〇円 送料二〇〇円

わが医学と求道

定価 五〇〇円 送料八〇円

以上、発行所 京都市下京区堀川通花屋町

振替 京都 二五七八八番

人間が人間になるために

定価 一五〇〇円 送料二〇〇円

発行所 東京都千代田区神田小川町

東京古書会館ビル四階

第一書房

振替 東京 三九一二〇番

御紹介

本年の京都一道会には池山先生三十七回忌
にあたりましたので榊原徳草師が記念に先
生筆の名号を半切に印刷してお書下さい
ました。なお次の池山先生の著書も残部が
あります由で、御希望の方は実費と送料を
同封して御申込み下さい。

名号 八百円 送料七十円

絶対他力と体験 三百円 送料八五円

信を行く旅人 三百円 送料一一五円

京都市右京区山田開町 浄住寺
榊原徳草師宛

〈御案内〉

○一道会例会。毎月、第一、二、三日曜
午後一時半。南区駈上町二の八八

一道会館

※市バス、新郊通り一丁目下車、東入る三
筋目、左入る二軒目。

※地下鉄、新瑞橋終点下車、徒歩十五分。

※名鉄、呼続下車、徒歩二十分。

○教西寺法話会。毎月二十四日、午前午後

昭和三小桜町二丁目四番地。

※市バス御器所通り下車。

※栄町より、杖中（いりなか）行き、

北山下車。

※名駅より下の妙見町行き、御器所通り

下車。

定価 半年 五〇〇円 (送共)
一年 一〇〇〇円 (送共)

名古屋市南区駈上町二ノ八八

編集・発行人 花田 正夫

電話八二一〇七〇三七番

愛知県西加茂郡三好町大字福谷

印刷人 吉野 穂志郎

名古屋市南区駈上町二ノ八八

発行所 慈光社

振替口座 名古屋 一〇四七〇番

郵便番号 四五七